

「エチオピアの宦官への伝道 1」

2016年04月20日

使徒言行録8章26節～33節。さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と言った。フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、ノ口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」

主の天使がフィリポにサマリアから一転して「エルサレムからガザに下る道に行け」と命じた。フィリポは寂しい道のガザに向かった。ガザは現在、パレスチナ人がイスラエル人から押し込まれ苦しんでいる地域で、当時はエジプトに向かう街道があった。この街道を、エチオピアの女王カンダケの全財産の管理をしていた高官がエルサレム神殿に礼拝に行き、帰る途中の馬車を走らせていた。彼はエチオピアの女王の全財産を管理する、去勢させられた宦官であった。

エチオピアは現在、最貧国の一つであるが、当時はエジプトを凌ぐほどの強国であった。権力の中核で仕える者は反抗心を削ぎ、忠実に仕えさせるために去勢され、家族は持てず、当然、子孫をつなげることはできない。女王の命令に「仰せの通りにいたします」という言葉しか持っていなかった。彼は自分の人生を喪失した苦悩の中で、エチオピアの宗教に満足せず、天地を創造した唯一全能の神を説くユダヤ教に救いを求め、改宗した。憧れのエルサレム神殿に礼拝に行ったが、去勢され、体に傷を負う宦官は神殿の境内に入ることはできない。神殿を仰ぎ見て、深々と礼拝したことだろう。しかし彼は、女王の全財産を管理する高官であるから裕福であった。エチオピアからエルサレムまで馬車を仕立てて礼拝に行くには、従者を従え馬を取り換え、何ヶ月も費やし、莫大な費用がかかる。それを賄えるほどの金持ちであった。お金は十分すぎるほどあるが、自分を生きることを失った苦悩は深かった。ユダヤ教徒としてエルサレム神殿に礼拝に行き、その帰り道であった。

フィリポは「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と霊に促されたので、走り寄ると、宦官は預言者イザヤの書を朗読していた。「読んでいることがお分かりになりますか」と問うと「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と答えた。彼は馬車に乗って傍に座るように頼み、教えを請うた。朗読していた聖書はイザヤ書53章「主の僕の歌」の7節、8節であった。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、ノ口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」彼は襟を正して聖書を朗読していたであろうが、この聖句から目を離せなくなった。この聖句から、フィリポの宦官への伝道が始まる。